

ご自由にお持ち帰りください! **FREE**

定価 永遠の **0** 七〇円

海賊とよばれた男

試し読み



安倍晋三総理も愛読

全国からたくさんの感動の声
ありがとうございます

2013年

本屋大賞

全国書店員が選んだ
 いちばん！
 売りたい本



第1位!!!

【物語のあらすじ】

物語は、敗戦の日から始まる。

異端の石油会社「国岡商店」を率いる国岡鐵造くにおかてつぞうは、戦争でなにもかもを失い残ったのは借金のみ。

戦前、国や軍の統制に反旗を翻し、社業の中心を海外に移していたため敗戦によっていっさいの海外資産を失ったのだ。そのうえ大手石油会社から排斥され売る油もない。この苦境を脱するために重役たちは、社歴の浅い店員からの大量解雇を提言する。しかし国岡は、「馬鹿者！ 店員は家族と同然である。君たちは家が苦しくなったら、幼い家族を切り捨てるのか」と一喝。社員ひとりたりとも鹹首あざなせず、旧海軍のタンクの残油さくらなど糊口をしのぎながら、遅しく再生していくのだが……。

20世紀の産業を興し、人を狂わせ、戦争の火種となった巨大エネルギー・石油。その石油を武器に変えて世界と闘った男、国岡が見た「明治・大正・昭

和」とはなんだったのか。(以上上巻)

戦後、日本の石油エネルギーを牛耳ったのは、七人の魔女（セブン・シスターズ）とよばれる巨大国際石油資本「メジャー」たちだった。日系石油会社はつぎつぎとメジャーに蹂躪され、軍門に下ってゆく。追いつめられる国岡商店。

一方、世界一の埋蔵量を誇る油田をメジャーのひとつアングロ・イラニアン社（現BP）に支配されていたイランは、アフリカからアジアにわたる民族運動の高まりの中で、石油国有化を宣言。激怒したイギリスはペルシャ湾に軍艦を派遣するなどイランを経済封鎖する。イランは国際的に孤立し、絶体絶命に。そのとき一隻の日本のタンカー「日章丸」が、一触即発のペルシャ湾に向けて神戸港から出港した――。

不世出の経営者・出光佐三がモデルの国岡鐵造と彼が引きよせた痛快な人物たちが縦横無尽に暴れ回るノンフィクションノベルは、筆者・百田氏が発掘した「日章丸事件」で最高潮へ。(以上下巻)

序章

この物語に登場する男たちは実在した



青い空がどこまでも続いていた。

湧き起こる白い入道雲のはるか上には、真夏の太陽が燃えていた。

見上げる国岡鐵造の額に汗が流れ、かけていた眼鏡がずれた。シャツにもべつとりと汗が滲んでいたが、暑さは微塵も感じなかった。

小学校の広い校庭に集まった人々の多くは、茫然と立ち尽くし、地面にひれ伏し、なかにはすすり泣く者もいた。

鐵造は度の強い眼鏡をかけ直すと、しっかりと両足を踏みしめ、今しがたラジオで聞いたことを頭に反芻した。

日本は戦争に負けた——自分の立っている足元が巨大な沼となり、ずぶずぶと沈み込んでいくような錯覚を覚えた。絶望が全身を覆った。

これが世界を相手に戦った結末なのか。苦しさに耐え抜きながら、最後に勝利することを信じて戦った末の結果がこれなのか。この国はどうなってしまうのか。米英やソ連に占領され、国土と国民は蹂躪されるのだろうか。日本という国は亡んでしまうのだろうか。

いや、と鐵造は思った。日本人がいるかぎり、日本が亡ぶはずはない。

この焦土となった国を今一度建て直すのだ。その戦いは艱難辛苦かんなんしんくに満ちた厳しいものになるだろうが、戦争以上に厳しいものではないはずだ。もはや銃弾や砲弾が飛び交うことはない。殺されることも、殺すこともない。すべては己と己が守るべき家族のための戦いだ。死ぬ気で立ち向かえば、必ず日本は再び立ち上がれるはずだ。

鐵造はいったん家族の待つ家に戻った。栃木県の松田（現・足利市）に借りている小さな家には、妻と四人の娘が暮らしていた。東京への空襲が激化した五月に、ひとまず女だけを疎開させていた。鐵造は東京で都立一中（現・日比谷高校）に在学中の十七歳の長男の昭一しょういちと二人で生活していた。

三日前に妻と娘の顔を見るために松田を訪れていたが、まさかこの地で玉音放送ぎょくおんに接するとは思わなかった。

「戦争が終わった」

家に戻り、妻の多津子たつこに言うと、彼女は頷うなずいた。すでに近隣の者から知らされていたのだろう。

多津子の目は真っ赤だった。五人の子を持つ母として言いしれぬ不安が胸に渦巻うずまいているであろうことは鐵造にもわかった。長女の正子は十二歳だが、末娘はまだ五歳だった。

「これからどうなるのでしょうか」

多津子は不安な眼をして言った。

「もう空襲おびに怯おびえることはない」

妻はそんなことを訊きいているのではないという顔をした。

「ゆっくり話している時間はない。しかしこれだけは言っておく。国岡鐵造の妻であるからには、けっ

してうろたえてはならん。母たるお前が怯えた顔を見れば、正子たちも怯える。日本の女として、凜りんとせよ」

多津子は居住まいを正した。

「今からすぐに東京に戻らねばならない。落ち着いたら、東京に呼び戻す。それまで娘たちを頼む」
「はゝ」

力強く頷く多津子の顔には、さきほどまでの途方に暮れたような表情はどこにもなかった。

鐵造はその日のうちに東京に辿りつくことができた。

ドイツの高級車、オベルの後部座席に揺られながら、ふと自らの生涯を想った。

この年、彼は還曆を迎えていた。古来、曆は六十年をもつてひとつの区切りとなす。鐵造は自らの本卦け還りの年に、日本がこのような大難を迎えたことに運命的なものを感じた。自分の新しい人生と日本が重なるような錯覚を覚える。

東京の惨状は三日前と変わらなかつた。見渡すかぎりの焼け野原で、かつて世界に冠した華々しい帝都の面影はどこにもない。道を往く人々の体からは生気が感じられず、その目はうつろだった。

無理もない、と鐵造は思った。今日まで悲惨な境遇に耐えながら銃後の務めを懸命に果たしてきたのは、ただひとつ、戦争に勝つという目的のためだけだった。今やそのすべてが失われたのだ。この戦いで亡くなった幾多の命——父、母、兄、弟、姉、妹、もはや二度と歸らぬ尊い家族は何のために失われたのか。

しかし鐵造は同時に人々のうつろな目の奥に安堵と喜びの光があるのを見た。それは人間が持っている生存本能であった。もう空襲はない。爆弾が降り注ぐ恐怖の夜は来ない。戦地で戦っていた父や兄、息子たちが帰ってくる。敗戦という絶望的な状況の中にありながらも、生き延びたという喜びがあった。鐵造はそこに一縷の希を見た。

鐵造の乗るオペルは銀座に着いた。銀座もかつての華やかな光景はどこにもない。ビルの大半は瓦礫と化し、優美なたたずまいを見せていた歌舞伎座も五月の空襲で、外壁だけを残して焼け落ちていた。その隣にある国岡商店の本社である「国岡館」は奇跡的に焼失を免れていた。

国岡館の前で車を降りた。夕刻であるのに西日はじりじりと照りつけ、体にはみるみる汗が噴き出た。しかし彼は、この汗は生きている証だと考えた。どっこい俺は生きている。そして日本もまだ死んだわけではない。

国岡館は鐵造の帰りを待っていたように見えた。いつかは空襲で焼けるであろうと覚悟していたが、もはや燃え落ちることはない。彼は夕日を受けて聳え立つ五階建ての国岡館を見上げて勇気を感じた。

「あ、店主」

国岡館に足を踏み入れた時、常務の甲賀治作が声をかけた。鐵造は社員たちには「店主」と呼ばれてゐる。

「いつ、東京に戻ってこられたのですか」

「今だ」

「放送はお聞きになりましたか」

「松田で聞いた」

「本当に日本は負けたのでしょわか」

鐵造はそれには答えず、「ほかの店員たちは？」と訊いた。

「正午の放送を聞いた後、とりあえず本日の業務は取りやめとして、帰らせました」

「よろしい」と鐵造は言った。「明日は一日休みにする。ただ明後日は全員出店するように」

甲賀は、わかりましたと答えた。

甲賀は三十年にわたって国岡商店で鐵造の片腕となつて働いてきた番頭だ。もうすぐ五十歳になる。

気の強い剛毅な男であつたが、彼をしても表情には不安がいつぱいに漂つていた。

「店主、外地はどうなるのでしょわか」

鐵造は甲賀の長男が中国へ出兵していることを思い出した。日本の敗戦によつて、戦地にいる兵隊たちにはどんな運命が待ち構えているのか、想像もつかなかった。「生きて虜囚りょゆうの辱めはずかしを受けず」を信念に戦つてきた日本軍は、はたしておとなしく武装解除を受けるのだろうか。それとも徹底抗戦するのだろうか。いや、それはあつてはならないことだ。

「終戦は陛下のご意志だ」鐵造は呟つぶやくように言った。「もはや戦闘はないだろう」

「わが国岡商店の営業所はどうなるのでしょわか」

「うむ」

鐵造は腕組みした。

国岡商店の海外の営業所は六十二店、これは国内の八店をはるかに上回る。社員の大半は朝鮮、満

州、中国、そして南方の比島（フィリピン）、仏印（ベトナム）、蘭印（インドネシア）で働いていた。

おそらく海外の営業所はすべて失われるであろう。しかし鐵造の胸には、そのことに対する絶望感はなかった。敗戦という、日本国の歴史が始まって以来の国難の前には、ささいなことだった。それよりも心を配るべきは、海外にいる国岡商店の店員たちの安全であり、甲賀の息子のように戦地へ赴いていく兵隊たちのことである。国岡商店の店員の中にも徴兵されている者が何人もいる。

「甲賀も今日は家に帰れ。家族のそばにいてやれ」

甲賀は一礼すると、国岡館を去った。

鐵造はいったん、国岡館を出ると、会社の前に車を止めていた運転手の羽鳥に、「今日は帰ってよい」と言って、彼を帰らせた。

それから再び国岡館に入り、館内に勧請かんじようしている宗像神社むなかたを参拝して、三女神に日本と日本民族の加護を願った。宗像神社は鐵造の郷里である宗像に総本社がある由緒ある神社で、幼いころより深い尊崇の念を抱いていた。

その夜、鐵造は国岡館にひとり泊まり、翌日は店主室で、座禅を組んで瞑想した。

八月十七日の朝、社員たちが国岡館の二階にある大会議室に集まった。五十畳ほどの広さを持つその部屋は、入店式などの特別の催しするときにはホールとして使用していた。部屋にはそれらの催し用の雛壇もあった。

国岡商店の社員は約一千名いたが、七百名弱は海外支店と営業所について、二百名弱が軍隊に応召中

だった。ただ現時点では、その生死も消息もまったく不明だった。内地に残った社員は百四十九名。東京の本社に残っているのは六十名だった。

鐵造は毎年、年初に社員を集めて訓示をするが、それ以外の日におこなうことは滅多になかった。だから、この日の訓示は異例のことだった。

鐵造は壇上から社員たちを見渡した。皆、一様に不安そうな顔で自分を見つめている。戦争が終わったのは二日前だ。日本はどうなるのか、会社はどうなるのか、家族たちはどうなるのか——鐵造には彼らの恐怖が痛いほどわかった。だからこそ、彼らに言わなくてはならない。

「今から、皆の者に申し渡す」

鐵造はよく響く大きな声で言った。

鐵造の背は一七〇センチ近くある。明治十八年生まれとしては大柄な男だ。その鐵造を見つめる六十名の社員がいつせいに強張^{よわば}った。

壇上で鐵造と少し離れて立つ常務の甲賀の全身にも緊張が走った。甲賀は、店主が国岡商店の終わりを告げるのだろうと思った。

国岡商店は鐵造が一代で築き上げた石油販売会社であったが、戦前戦中、活動の大部分を海外に置いていた。戦争に負けたということは、それらの資産がすべて失われるということの意味していた。鐵造のもとで三十年もともに頑張ってきた甲賀にとっては、国岡商店の解散は、終戦にも等しい悲しみであった。

鐵造はゆっくりと、しかし毅然とした声で言った。

「愚痴をやめよ」

社員たちははっとしたように鐵造の顔を見た。甲賀もまた驚いて鐵造を見た。

「愚痴は泣きごとである。亡国の声である。婦女子の言であり、断じて男子のとらざるところである」
社員たちの体がかすかに揺れた。

「日本には三千年の歴史がある。戦争に負けたからといって、大国民の誇りを失ってはならない。すべてを失おうとも、日本人がいるかぎり、この国は必ずや再び立ち上がる日が来る」

甲賀は自分の体が武者震いのようにふるえてくるのを感じた。

鐵造は力強く言った。

「ただちに建設にかかれ」

社員たちの背筋が伸びるのを甲賀は見た。ホールの空気がびんと張りつめたような気がした。

しんと静まり返った中に、鐵造の声が朗々と響いた。

「昨日まで日本人は戦う国民であったが、今日からは平和を愛する国民になる。しかし、これが日本の真の姿である。これこそ大国民の襟度きんどである。日本は必ずや再び立ち上がる。世界は再び驚倒するであろう」

店主の気迫に満ちた言葉に、甲賀は体の奥が熱くなるのを感じた。

鐵造は壇上から社員たちを睥にらみながら、「しかし——」と静かに言った。

「その道は、死に勝る苦しみと覚悟せよ」

.....つづきは本編「海賊とよばれた男」でぜひ！



「海賊とよばれた男」が百倍面白くなる登場人物相関図

実名対照

- ◎ 親密
- 友好
- △ どちらでもない
- × 敵対

国岡徳三郎
 (父||出光藤六・嘉永6年生まれ)

国岡稲子
 (母||出光千代)

国岡万亀男
 (兄||出光雄平)

国岡達吉
 (弟||出光弘)

国岡正明
 (末弟||出光計助)

恩人
日田重太郎◎
 自分の家屋敷を売り払って、
 国岡鐵造の創業資金を提供。
 国岡の夢にかけた人物

満州国・陸軍
星野直樹△
 満州国國務院総務長官

中村儀十郎○
 陸軍本省整備局燃料課長・大佐

GHQ
アンドレー・チャン×○
 参謀部第4部(64)
 兵站部燃料補給班部長

ジョン・フジオアイン◎
 参謀部第2部(62)少佐。
 1909年カリフォルニア生まれの日系二世

家族・仲間

国岡鐵造
 (出光佐三)

東京高商(橋大学)を卒業、満鉄に入社。戦後、抑留されたソ連から帰還、国岡商店に入る。イランの石油買い付け交渉を担当。武知とともに「民族派の首相」モサデクに会いに行くため極秘裏に同国の首都テヘランに向かう。国岡商店2代目社長

明治18年(1885年)福岡県宗像郡赤間村(宗像市赤間)生まれ。先祖は宇佐八幡宮の大宮司。苦学して神戸高商(神戸大学を卒業して)の反対を押し切り従業員として三人の酒井商会の丁稚からスタート。一代で、石油業界に君臨する国岡商店(出光興産)を築き上げた不世出の経営者

店員たち重役たち

藤本壮平(長井弘介)
 元海軍大佐。戦後仕事のなくなった国岡商店でラジカ修理を手がける

東雲忠司(石田正實・出光興産3代目社長)
 国岡商店店員。戦時中南方支社勤務につく。戦後、鐵造の腹心として石油メジャーと渡り合う

武知甲太郎(手島治雄・出光興産専務)
 陸軍士官学校卒。各国の駐在武官を歴任。元中野学校教官。国岡鐵造のもとで働きたいと入店。GHQや大手石油会社の策謀を看破。国岡商店の危機に立ち向かう。イランとの交渉を、国岡正明とともに担当

宇佐美幸吉
 国岡商店店員。戦後復員。タンク底の残油浚いに駆ける。のち武知の右腕となつて活躍

重森俊雄
 国岡商店店員。金沢高工(金沢大学)出身。徳山製油所の難工事「シー・ハウス方式の海底パイプ敷設」に挑む

妻子供

国岡ユキ(最初の妻)

国岡多津子
 (2番目の妻・土佐山内家一族の娘)

国岡昭一(長男||出光昭介)

永遠の0
 零式艦上戦闘機
 航空兵

セブン・シスターズ

カーソン×
カルテックス日本支社重役
スタンダード石油満州副支配人を経て上海支店長、戦後、スタンバック重役となり、日本に石油顧問団幹部として来日

パンク・オブ・アメリカ

ハリリー・クイネル○
極東担当部長、正明と日章丸の処女航海先、サンフランシスコで出会う
ジョージジカラン○
副社長

福岡人脈

石橋正二郎○
ブリヂストンタイヤ創業者
鳩山威一郎○
石橋の女婿。鳩山一郎の長男

官僚

人見孝 商工省石油課長○
倉八正 通産省貿易局輸入第一課長○
間淵直三 通産省輸入第一課係長○

法廷

柳井恒夫○
国際弁護士。元外務官僚、東京裁判時、重光葵の弁護人
エリック・デベッカー×
アングロ・イラン社弁護人
北村良一△
日章丸事件裁判の判事

政界

池田勇人 通産大臣、のち首相
三木武夫 通産大臣、のち首相
アンドレ・マルロー◎
文学者。フランス情報相、文化相を歴任

銀行・保険

長野善五郎 二十三銀行頭取○
首藤正寿 大分合同銀行初代頭取○
大江清 東京銀行常務○
和田正義 東京海上火災保険常務○

日系石油

鳥川卓巳××
石統(石油配給統制会社)社長、日邦石油副社長
増山浩 石油配給公団本部業務部長×
植村甲午郎 通産省石油審議会会長△

イラン

ムハンマド・モサデク○
イラン首相。埋蔵量世界一といわれていたイラン石油の国有化法案を議会で通過させ、「セブン・シスターズ」の一角アングロ・イラン社(現・ブリティッシュ・ペトロリウム)がもつ全石油施設を接収した

モルテザ・ホスロフ・シャヒ○
イラン系アメリカ人。貿易商
ザヘデー將軍
CIAと画策してモサデク首相追い落としのクーデターをおこす

H・ノーマン・シユワルトコフ
イラン政府軍事顧問。息子は、湾岸戦争時のアメリカ中央軍司令官

日章丸

新田辰男◎
日章丸船長。40年来、船にのつてきたヘレン。戦時には徴用船を操舵、米海軍の魚雷攻撃を体験
竹中幹次郎 機関長◎
新田満壽子 新田船長の妻
三益一太郎 飯野海運副社長×

敗戦からわずか8年後、日本の小さな会社がイギリス海軍相手に戦った

実録 忘れられていた「日章丸事件」の衝撃

——小説のクライマックス「日章丸事件」は、60年前の4月10日、日本の小さな石油会社のタンカーがイギリス海軍の海上封鎖を突破してイランに入港、世界を驚かせた大事件だった。私たちはなぜこの歴史的事実を記憶のなから消し去ってしまったのだろうか……。

1951年

3月・イラン国民会議、石油国有化法案可決

6月・イラン政府、アングロ・イラニアン社(以下ア・イ社)の全施設を接収
イギリス政府、イランを経済封鎖
セブン・シスターズ(石油メジャー7社)、イラン石油販売をボイコット

1952年

3月・東京麻布の石橋正二郎邸で、出光計助氏極秘裡にイラン側と接触

6月・アバダンでイラン石油を積んだイタリア船「ローズ・マリー号」、イギリス海軍の艦船に拿捕される

11月・出光計助専務、手島治雄常務、パキスタン経由でイランの首都テヘランへ

1953年

1月・アデン最高裁判所、イタリア船「ローズ・マリー号」がアバダン港で積載した石油のア・イ社への返却を命令

2月・出光、イラン国営石油会社との間で石油売買の基本契約を締結

3月・日章丸、イランに向けて神戸港を出港

4月・日章丸、アバダン港に着棧
イギリス政府、日本政府に真相調査を依頼

5月・ア・イ社、日章丸の積荷(石油)差し押さえの仮処分を東京地裁に申請
日章丸、川崎港に着棧

東京地裁、ア・イ社の提訴を却下。ア・イ社ただちに東京高裁に控訴



ムハンマド・モサデク首相(前列左)は、1951年3月、アングロ・イラニアン社の石油プラントを国有化、52年10月イギリスと国交を断絶する。日章丸事件の直後CIAが工作したクーデターで失脚、軟禁状態のまま不遇のうちに死去するが四半世紀後の79年パーレビ国王を倒したホメイニ革命によって名誉を回復する



イギリスを第二次世界大戦の勝利に導いた救国の首相ウィンストン・チャーチルは1951年に返り咲く。国策石油会社であるアングロ・イラニアン社のもつイラン石油をめぐるモサデク首相と対立。ただちに軍艦をベルジャ湾に派遣するなど砲艦外交でイランを追いつめた



日章丸の新田辰男船長（小説でも実名で登場）は、イギリス軍艦によるペルシャ湾の海上封鎖を「丸腰」で突破する。川崎港に戻ったとき、新田船長の甥である俳優の山本學氏（当時・成蹊高校2年生）は同船を訪ねている



1952年11月5日、出光興産（小説では国岡商店）出光計助専務（同・国岡正明）、手島治雄常務（同・武知甲太郎）の二人は、まだ国交のないイランへ向けて羽田空港を發つ。写真はテヘランのメヘラバード空港での計助氏（左）と手島氏



日章丸がイランで積み込んだ石油をめくり、出光vs.イギリスの戦いは、法廷に舞台を移す。写真は、東京地裁での第1回頭弁論。傍聴席最前列向かって左から3人目が出光佐三



日章丸は、1951年に進水。当時としては、1万8000トンのタンカーは破格の巨船だった。正式には、日章丸二世。一世は、戦前に建造されたが、軍に徴用され、戦没した



第1回頭弁論の法廷で「私は日本人として俯仰天地に愧じない行動をもって終始する」と発言して退廷、すぐに日章丸が着桟している川崎港へ。船上で記者団に囲まれ取材に応じる佐三氏

写真/出光百年史・協力/出光興産





「海賊」作者・百田尚樹

ベストセラー連発の秘密

自宅1階の仕事部屋で。文机にパソコン、その前に座る百田氏の周りは、資料、雑誌、書籍の山、山、山……文字どおり足の踏み場もない。百田氏は、「海賊とよばれた男」の執筆中に、3回救急車で病院に搬送されている。執筆中に胆石発作をおこし、5月に入ってようやく手術したものの、その後1ヵ月、出血がとまらなかった。「僕の小説の主人公たちは、絶対に引かない、逃げない。人生っていうのは、戦わないとあかんと思うてるんです」。「海賊」の主人公・国岡鐵造は、一生涯、大きな敵と戦い続けた



◀妻の理香さんと、自宅地下のオーディオ・ルームで。理香さんは、京都大学経済学部出身の才媛。1980年頃、高視聴率を誇った視聴者参加型お見合い番組「ラブアタック!」で美人女子大生にふられる「みじめアタッカー」として人気者だった同志社大学在学中の百田氏と、番組に出演したことがきっかけで交際が始まる。その後、売れっ子構成作家になった百田氏だが、50歳になって小説に挑戦すると一念発起。「家計はなんとかするから最後まで書きなさい」そう言って背中を押したのは理香さんだった。そして、処女作『永遠の0』は完成した

▶25年前の番組立ち上げからずっとかかわってきた『探偵! ナイトスクープ』では、いまもチーフ構成作家をつとめている。「僕は、テレビでも小説でも、観た人が、ああ、生きてよかったなあ、と幸福になる、元気づけられる、勇気がわいてくるものじゃないかなって思っているんです」。写真は、西田敏行さん、竹山隆範さんと打ち合わせのひとこま



▼100万部を突破したベストセラー『永遠の0 (ゼロ)』は、主演・岡田准一、ヒロインは井上真央で映画化され2013年に公開される。監督は、『三丁目の夕日』の山崎貴氏。7月10日、奄美大島のロケ先を訪ねた百田氏と山崎監督(左)は、いまやメル友同士



『週刊現代』9月15日号より転載



『海賊とよばれた男』の主人公・国岡鐵造のモデル

出光佐三（出光興産創業者）の生涯

1885 (明治18) 年

8月22日、福岡県宗像郡赤間村に生まれる(上161P～)

1909 (明治42) 年・23-24歳

神戸高等商業学校(現・神戸大学)卒業。小麦粉と機械油を扱う酒井商会に入店(上184P～)

1911 (明治44) 年・25-26歳

門司で出光商会創業。日本石油の特約店として機械油を扱った(上209P～)

1913 (大正2) 年・27-28歳

消費者本位の廉価で漁船燃料油を海上で販売。海賊とよばれる(上231P～)

1914 (大正3) 年・28-29歳

外油独占の大陸市場へ進出し、満鉄(南満州鉄道株式会社)に車軸油の納入に成功(上244P～)

1919 (大正8) 年・33-34歳

満鉄用の極寒でも凍結しない車軸油の開発、販売(上264P～)

1924 (大正13) 年・38-39歳

第一銀行門司支店より25万円の借入金引き揚げ要請。二十三銀行の肩代わり融資で窮地を脱する(上282P～)

1940 (昭和15) 年・54-55歳

出光興産株式会社の設立。上海に大規模油槽所建設。外油独占に対抗(上342P～)

1945 (昭和20) 年・59-60歳

敗戦により国内外の事業消滅。8月17日、社員に訓示。社員の首を切らず、ラジオ修理など様々な事業に乗り出す(上9P～)

1946 (昭和21) 年・60-61歳

旧海軍のタンクの底の残油を汲み取る作業を引き受ける(上74P～)

()内は小説の該当箇所。上は上巻、下は下巻

1947(昭和22)年◆61-62歳

石油配給公団が設立され、29店舗が販売店に指定され、石油業へ復帰する(上140P～)

1949(昭和24)年◆63-64歳

外油と結託した日本石油協会の反対をはね除け、石油の「元売業者」に指定される(下32P～)

1950(昭和25)年◆64-65歳

製油所の各社共同使用がなくなり、消費地精製方式で苦境に。タンカー建造を申請(下45P～)

1951(昭和26)年◆65-66歳

日章丸(二世)就航(下70P～)

1952(昭和27)年◆66-67歳

日章丸で輸入した高品質で安価なアポロガソリンを発売(下77P～)

1953(昭和28)年◆67-68歳

メジャー支配に挑戦した「日章丸事件」(下83P～)

1957(昭和32)年◆71-72歳

出光初の製油所を徳山に建設(下237P～)

1959(昭和34)年◆73-74歳

国の要請によりソ連石油を輸入(下284P～)

1962(昭和37)年◆76-77歳

第一宗像丸遭難事故(下304P～)生産調整に反対し、石油連盟を脱退(下311P～)

1966(昭和41)年◆80-81歳

生産調整撤廃により石油連盟に復帰(下329P～)出光丸就航(下334P～)

1974(昭和49)年◆88-89歳

出光美術館でアンドレ・マルローと対談(下353P～)

1981(昭和56)年

3月7日、腸閉塞により死去。
享年95



1921年(大正10年)創業10周年の記念写真。前列中央が佐三氏



著者、小学校1年生の頃、父親と思い出の1枚。「親父は水道局の職員で、いわゆる肉体労働者。学校も夜間中学しか出ていない。でも本が好き。うちは貧しかったんですけど、子どもの僕に岩波の世界少年少女文学全集という全50巻ぐらいの本を買ってきて「これを読め」と」(百田氏)



『海賊とよばれた男』(上・下巻)

著者・百田尚樹 / 定価・各1,680円(税込み) / 講談社

著者・百田尚樹 受賞の言葉

私が「この小説のモデルとなった出光佐三という偉大な男の生き様を、一人でも多くの日本人に知ってもらいたい!!」と強く思ったように、『海賊とよばれた男』を読んでくれた書店員の皆さんもまた同じ気持ちを抱いてくれたのかもしれません。全国の書店員の皆さま、本当にありがとうございます。ございました。

特集

ベストセラー連発

百田尚樹の秘密

なぜか歴史に埋もれていた「日章丸事件」の衝撃

主人公・国岡鐵造のモデルとなった出光佐三とは?

禁ネタバレしぼり

海賊が百倍面白くなる登場人物相関図

実名対照



A Man Called Pirate